

2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価 Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 <概評> ・進路支援の方針にある「体系的なキャリア教育を実施」の観点から、全学共通科目と各学部設置のキャリア教育科目との体系化が期待される。
2016 年度外部評価委員会指摘事項 【特筆すべき事項】 ・「基礎教育科目」として多くの外国語科目が提供されていることは、グローバル化時代や異文化理解などの観点からも、高く評価できる。
前年度からの課題 （2016 年度点検・評価シート IV 次年度への課題 より転記） 教育課程の適切性について定期的に検証する仕組みを構築する。例えば、フレッシュマン・セミナー／スポーツキャリア・セミナー等授業でのアンケート実施・集計し、それについて授業担当教員ミーティングにより検討したうえで学科会議にて報告し、改善点について教授会での報告およびシラバスへの反映を行う。

Ⅰ 評価項目・担当部局

対象部局	スポーツ・健康科学部
評価基準 4	教育内容・方法・成果
中項目 4-2	教育課程・教育内容 【自己評価 A】
点検・評価項目(1)	4-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
評価の視点	必要な授業科目の開設状況
	順次性のある授業科目の体系的配置
	専門教育・教養教育の位置づけ
点検・評価項目(2)	4-2-2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。
評価の視点	学士課程教育に相応しい教育内容の提供
	初年次教育・高大連携に配慮した教育内容
	キャリア教育の実施状況
点検・評価項目(3)	4-2-3 国際化に対応した教育を行っているか。
	教育課程における国際化の推進
	学生の国際交流（交換留学、海外研修等）の推進
点検・評価項目(4)	4-2-4 教育課程の適切性について定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

Ⅱ 点検・評価 対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-2-1	スポーツ・健康科学部の授業科目は、全学共通科目、基礎教育科目、専門教育科目の 3 つの科目群から編成されるが、全学共通科目を除いて、スポーツ科学科と健康科学科では科目内容、必修・選択の別とも異なる（A4-2-12）。以下、学科別に科目編成の概要を述べる。 <スポーツ科学科> スポーツ科学科は、教育課程の編成・実施方針に基づき、必要な授業科目の編成に努めている。授業科目の編成にあたっては、順次性と体系性に配慮して、1 年次から 4 年次を通した「スポーツ科学科における学びの航路図——ルートマップ——」を作成している。1 年次は、大学生としての基本的態度と基礎教養・技能の習得をめざす「フレッシュマン・ルート」、2 年次は、スポーツ科学科生としての専門知識・技能の習得と将来観の確立をめざす「スポーツキャリア・ルート」、3、4 年次は、“スポーツ科学人”としての将来観に基づく自己実現の達成をめざす「ルート・フォー・フューチャー」である（A4-2-12 p.47）。これらの教育目標を達成するために、1 年次配当の基礎教育科目の必修科目に「英語」「フレッシュマンセミナー」「情報科学」などの科目を、選択科目に「中国語」「韓国語」などの語学科目を置き、専門教育科目の必修科目に「スポーツ科学概論」「解剖学」などの講義科目、「水泳」「陸上競技」などの基礎運動科目を、選択科目に「スポーツ運動学」「スポーツコーチング論」などの科目を配置している。2 年次配当では、基礎教育科目の必修科目に「スポーツキャリアセミナー」「コミュニケーション英語」を、専門教育科目の選択科目に「スポーツ生理学」「スポーツ栄養学」「スポーツ心理学」「生涯スポーツ論」などの講義科目と、「テニス」「ラグビー」「柔道」「剣道」などの実技科目を多数配置している。3 年次以降は、専門教育科目の選択科目に、各スポーツ種目のコーチングに関する演習系授業として、「コーチング 水泳」「コーチング 陸上競技」「コーチング 剣道」「コーチング 体操
-------	--

	競技」などを、また、スポーツ科学各分野の理論・研究手法をより深く学ぶためのルートとして、「スポーツバイオメカニクス演習」「スポーツ生理学演習」「スポーツ社会学演習」などを開講している（A4-2-12 p.50～p.52）このほか、自由科目に、「化学」「生化学」「免疫学」「環境衛生学」などが健康科学科との共通科目として開講されている。授業科目数は、全学共通科目を除いて、基礎科目 19（うち言語科目 12）、専門科目 113 である（A4-2-12 p.50～p.52）。 <健康科学科> 健康科学科は、教育課程の編成・実施方針に基づき、各学年に順次性のある授業科目（全学共通科目、基礎教育科目、専門教育科目、資格教育科目）を体系的に配置している。基礎教育科目では、1 年次の必修科目として、国民の健康づくりを担う学生の倫理観を養う「生命倫理学」、健康科学の基礎を修得させる演習科目を設置している。専門教育科目では、学年進行に伴って専門性の高い学修ができるように、「生理学」「生化学」「公衆衛生学」「解剖学」などの多彩な科目が、講義、演習、実習科目として体系的に配置されている。また、臨床検査技師・食品衛生管理者などの医療系資格の取得をめざす学生たちのために、卒業要件単位外の科目として、それぞれの資格に対応した科目が置かれているのも本学科の特色である。開講科目数は、全学共通科目を除いて、基礎科目 17、専門科目 65、自由科目（専門）15 と、臨床検査技師に関する科目 12、食品衛生管理者・食品衛生監視員に関する科目 4、第二種作業環境測定士に関する科目 4 である（A4-2-12 p.69～p.86）。 上記の方針に基づいて、1 年次には“フレッシュマン・セミナー”をはじめ、高大連係による基礎科目（化学、生物）講座を開講している。さらに、3、4 年次における一貫した卒業研究演習と卒業研究では、多分野にわたるより専門性の高い実践的なテーマ学習を行っている。 両学科は、スポーツ科学科のスポーツ実技やスポーツ科学科目、健康科学科の自然科学系科目を相互に履修できるよう、専門科目の一部を他方の学科の自由科目に設定し、履修の幅を持たせている。
4-2-1	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 （1）必要な授業科目の開設状況について【×】 具体的事例： （2）順次性のある授業科目の体系的配置について【×】 具体的事例： （3）専門教育・教養教育の位置づけについて【×】 具体的事例：
4-2-2	学科ごとの教育課程の編成は、以下のとおりである。 <スポーツ科学科> スポーツ科学科は、初年次教育として、1年次開講の「フレッシュマンセミナー」において、大学で専門的内容を学ぶための基礎学力の確認と努力の方向性を確認し、日常生活上のマナーやソーシャル&コミュニケーションスキルの要点について学ぶとともに、大学への帰属意識の向上を図っている。また、キャリア教育として、2年次開講の「スポーツキャリアセミナー」において、「社会人基礎力」についての学生の認識を高める講義を行うとともに、毎回の授業においてその要素に関連する教材を用いた授業を展開している。それによって、卒業後の学生自分の進路について考える機会を提供し、そこに到達するためには何をしなければならないのかなどについて考え、進路選択につなげていくことをめざしている。（根拠資料：シラバス） 専門教育では、学科の教育研究上の目的に基づき、スポーツ科学の諸理論を学習する講義系科目とスポーツ技能の習得を目指す実技系科目を基礎として、スポーツ指導に必要な知識・技術を学ぶコーチング系演習科目、スポーツ科学各分野について実験・実習を通してより高度な理論、その実践現場への応用を学ぶ演習系科目が開講されている（A4-2-12 p.50 ～p.58、A4-2-16、A4-2-24）。 <健康科学科> 健康科学科は、初年次教育として、入学直後の「健康科学基礎演習」でのフレッシュマンセミナーにおいて、大学生としての日常生活上のマナーやコミュニケーションスキルについて学ぶ機会や、専門科目担当教員および資格科目担当教員による講演を通して将来の進路選択について自ら考える機会を提供している。また、高大連係を活用した吹上秋桜高校による化学および生物講座を課外授業として、定期的に毎年開講し基礎学力の充実に努めている。「健康科学基礎演習」では、主体的・自主的な学びを実践できるための基礎的能力（スキル）の向上を図っている（A4-2-12 p.69～p.86、A4-2-16、A4-2-24）。 さらに、キャリア形成支援・就職支援ガイダンスを適宜開催している。健康科学科で学習する科目および取得できる国家資格（臨床検査技師、食品衛生監視員、作業環境測定士Ⅱ種）の概要、また国家試験対策についてガイダンスを行い、より明確な将来観を学生に持たせることで、2、3、4年次に順次性・体系性のある学習ができるような専門科目教育と資格科目教育を提供している。また、希望する学生を対象に遺伝子分析科学認定士および危険物取扱主任者（乙）の資格取得を目指す学生の支援を行っている。遺伝子分析科学認定士は3名の合格者を輩出した。（根拠資料：学科ホームページ、学科協議会資料）
4-2-2	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 （1）学士課程教育に相応しい教育内容の提供について【○】 具体的事例：

	スポーツ科学科では、今年度入学の学生より新カリキュラムにて授業を展開している。前年度までの学科教務委員会を中心とした新カリキュラムの企画・準備の段階で、「学士課程教育に相応しい教育内容の提供」についても検討しながらカリキュラム改変の作業に取り組んだ。 健康科学科においては、平成 31 年度カリキュラム改編に向けて学科教務委員会を中心に検討中であり、そこでは「学士課程教育に相応しい教育内容の提供」についても検討している。 (2) 初年次教育・高大連携に配慮した教育内容について【○】 具体的事例： 今年度、スポーツ科学科では、新カリキュラム施行にともない、1 年生を対象とした「スポーツ基礎教養」を開講し、基礎学力の確認・向上を図る。 健康科学科では、昨年度に「より体系化した学科教育を実現するための一環として初年次教育を見直すとともに、不得意科目の克服に向けた対策」を課題としていた。これについて、入学前教育の一環として推薦入学者を対象とした基礎科目テキストによる課題演習を課し、その達成度については入学後に試験を実施して評価した。また、今年度より採用した元高等学校教諭による、化学・生物学を課外授業に配置し、リメディアル教育に重点を置いた初年次教育の取り組みを開始した。(根拠資料：教授会での報告) (3) キャリア教育の実施状況について【×】 具体的事例：
4-2-3	国際化に対応した教育活動の一環として、正課授業とは別に、スポーツ・健康科学部が協定を結んでいるオランダのノヴァ大学CIOS校と国際交流事業を推進し、2014年7月、2015年5月、2016年4月にCIOS校教員が本学部を訪問し、約2週間の滞在中に本学部生に講義を行った。また、毎年度11月に本学部教員の引率により、学生十数名がオランダへ渡航、CIOS校を訪問のうえ現地で交流活動を行っている(B4-2-23 d2-表15)。また、上海体育学院から定期的に留学生を受け入れている。 スポーツ科学科の国際化への取り組みの一環として、野外活動演習(ウィンター)の授業においてダイビング実習をサイパン島で実施し、本学部が国際交流協定を締結している現地の北マリアナ大学を訪問し交流活動を行っている。2017年度開始を目指して準備しているスポーツ科学科新カリキュラムにおいて、英語でスポーツ科学を学ぶことを目的とした授業の設置について準備を進めている。
4-2-3	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 (1) 教育課程における国際化の推進について【○】 具体的事例： スポーツ科学科の 2017 年度からの新カリキュラム開始において、英語授業の習熟度別クラス編成のために英語の非常勤講師を一人増員することにより、より実情に適したクラス編成を可能にした。また、新カリキュラムにおいては英語でスポーツ科学を学ぶ授業(科目名：英語でスポーツ科学)の開講を予定している。 健康科学科では、教員が学生を引率して国際学会(第 31 回世界医学検査学会：IFBLS、神戸市で開催)へ参加し、他国の科学者との交流の機会を設けた。そこで、同時開催された臨床検査学教育学会では生殖補助医療技術についての学生発表の機会が得ることができた。(根拠資料：学会プログラム/発表資料) (2) 学生の国際交流(交換留学、海外研修等)の推進について【○】 具体的事例：前年度より、オランダCIOS校との交流について、CIOS 校が開催を予定していた国際交流イベントへの本学部からの学生の派遣方法について検討していたが、他の欧州国の大学の都合で当該イベントの開催が見送られることとなってしまった。従って、今年度は、CIOS校から教員を本学部招聘し、学部生へ向けての授業における特別講師を依頼することを予定している。また、交流協定校である上海体育学院との交流のあり方について検討する。
4-2-4	教育課程の適切性については、両学科の教務委員会等において継続的に検証を実施し、カリキュラム編成に反映させて学士課程教育に相応しい教育内容を提供するよう努めている(B4-2-23 d2-表 19)。
4-2-4	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 教育課程の検証に関する責任主体・組織、権限、手続きについて【○】 具体的事例：各学科の自己点検・評価委員会および教務委員会が中心となって、教育課程の適切性を検討する段階的な取り組みの第一段階として、授業に対しての学生の事前の期待と事後の評価の点から「学生による授業評価アンケート」を分析し、結果について学科協議会・学部教授会に報告する。それを通じて、さらに調査すべき項目が見出されれば、それらについて独自のアンケート調査の準備・実施について検討する。

【効果が上がっている事項】

4-2-1	
4-2-2	

4-2-3	
4-2-4	

【改善すべき事項】

4-2-1	
4-2-2	スポーツ科学科では、フレッシュマンセミナーおよびスポーツキャリアセミナーでは履修学生への授業アンケートを年1回実施しており、これらの結果をとりまとめて授業の改善について検討する。2017年度よりスポーツ科学科は新カリキュラムを開始するので、その影響による専門科目に関する授業運営について学科教務委員会を中心に検討し必要があれば改善策を講じる。 健康科学科では、より体系化した学科教育を実現するための一環として初年次教育を見直すとともに、不得意科目の克服に向けた対策について検討する。
4-2-3	オランダ CIOS 校との交流について、本学部からの学生の派遣方法について検討する
4-2-4	教育課程の適切性について定期的に検証する仕組みについて、学部・学科における具体的な取り組みは不十分といえる。 例えば、フレッシュマン・セミナー／スポーツキャリア・セミナー等授業でのアンケートの実施・集計し、それについて授業担当教員ミーティングにより検討したうえで学科会議にて報告し、改善点について教授会での報告およびシラバスへの反映を行う。

Ⅲ 【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価				
			2014	2015	2016	2017	2018
中期目標 (2014～ 2018)	4-2-2 カリキュラムの見直し、初年次教育、キャリア教育の強化を行う。	学科協議会、教務委員会等における検討がカリキュラムや当該授業に反映されている。	→		A	S	
	4-2-1 学生の主体的な学びを支援するための仕組みを整備する。	学生が主体的に学ぶことができ、自ら到達度を計測できるようなシステムが構築されている。	→		A	C	
	4-2-3 学部または学科主体の国際交流を活性化させる。	国際交流に関わる実績が増加し、交流締結校との関係も深化している。	→		A	A	
	4-2-4 教育課程の適切性について検証するために、「学生による授業評価」の内容を分析し、適切性を図る指標の構築を目指す。					C	
16年度 目標	4-2-2 スポーツ科学科では、フレッシュマンセミナー及びスポーツキャリアセミナーの授業内容について授業アンケートをもとに改善を検討する。	次年度のシラバスへの反映			A		
	健康科学科では、入学直後に実施した基礎学力テストの結果に基づき、基礎学力向上に向けた課外授業等の設置について検討する。	「化学」「生物」についての課外授業を設置した。			S		
	4-2-3 国際交流協定校であるノヴァ大学 CIOS 校との交流内容について、交流の分野の拡張・本学部からの学生の当該校への派遣などについて検討する。	CIOS 校との今後の交流についての交流内容について、詳細の打合せや取決め、あるいは実施要項に関して学部教授会での進捗報告・承認。			S		
17年度 目標	4-2-2 初年次教育の一環として本年度より開始される「スポーツ基礎教養」および「化学・生物学の課外授業」の効果について検証する。	学期末の学生による授業評価アンケートおよび教員による自己評価、シラバスの内容に対する達成度（教授会にて報告）				A	

4-2-4 教育課程の適切性を検証するために、「学生による授業評価」の内容を分析し、現状を把握する。	学部教授会への報告
--	-----------

			C	
--	--	--	---	--

IV 評価専門委員会所見

4-2-1【現状】各学科とも、体系性、順次性を十分に考慮した教育課程を敷いていることが見てとれます。特にスポーツ学科の学びのルートマップに関しては、基礎教育から、多様な出口を想定した専門教育が準備されており、学生にとって大変魅力的な教育課程の仕組みができています。

4-2-3【現状】国際化に対応した教育活動として、オランダの大学との交流や上海体育学院の留学生の受け入れなど、具体的な方策が取られている点が多いに評価できます。現在準備中の英語によるスポーツ科学の学習も大変魅力ある取組であり、今後、その実現と必要なサポートの充実が期待されます。

V 所見への対応

--

VI 次年度への課題

中期目標「4-2-1学生の主体的な学びを支援するための仕組みを整備する。」とその目標達成の指標として「学生が主体的に学ぶことができ、自ら到達度を計測できるようなシステムが構築されている。」については、全学的にアセスメントテスト（PROG）が導入されることをうけ（本学部は次年度新入生より実施）、目標を次のように修正したい「アセスメントテストの内容とその結果について、学生の主体的な学びを支援するという観点から活用方法を検討する。」

中期目標「4-2-4教育課程の適切性について検証するために、「学生による授業評価」の内容を分析し、適切性を図る指標の構築を目指す。」および、17年度目標「4-2-4教育課程の適切性を検証するために、「学生による授業評価」の内容を分析し、現状を把握する。」については、今年度の授業評価アンケートの実施方法が変わった（Web方式）ことも影響してか、回答率が例年より著しく低かったためアンケート結果を分析して結果を得るに至らなかった。次年度には、この点を踏まえて学科独自のアンケート作成・実施も検討しながら取り組む。

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

A4-2-1 大東文化大学学則 《既出》A1-1
 A4-2-3 大学案内「CROSSING2017」 《既出》A1-6
 A4-2-4 2017 年度諸資格課程履修の手引き 《既出》A4-1-6
 A4-2-12 スポーツ・健康科学部 羅針盤（履修の手引き）2017 《既出》A1-14
 A4-2-16 大東文化大学・大学院シラバス（CD-R）
 大東文化大学ホームページ（Web シラバス）
<http://www.daito.ac.jp/campuslife/syllabus/index.html>
 A4-2-24 2017 年度スポーツ・健康科学部時間割表
 B4-2-1 大学ホームページ（全学教育全学共通科目）
http://www.daito.ac.jp/education/whole_university/common.html
 B4-2-10 大東文化大学ホームページ（自己点検・評価活動）
<http://www.daito.ac.jp/information/examine/inspection/index.html> 《既出》B1-16
 B4-2-19 2017 年度学年暦
 B4-2-23 大学データ集 《既出》B1-22

〔追加資料〕